



ローン・ウルフの世界出会い旅



北海道医療大学心理科学部 教授

中野 茂 (なかの しげる)

北海道大学教育学研究科博士後期課程単位修得満期退学。専門は発達心理学。著書は『遊びの保育発達学』（分担執筆，川島書店），『保育の心理学』（共編，ミネルヴァ書房），『自閉症の子どもたち』（共訳，ミネルヴァ書房）など。

私は、旅行プランナーに向いていたと自認するほど旅行プランを立てることが得意です。自分で手配して、一人で出かけます。訪問国は、のべ30カ国以上になります。しかし、私が学生の頃は、まだ、1ドル360円の時代で、海外へ出かけることは夢のまた夢でした。

私が職に就けたのは35歳の時ですが、40歳からは世界で仕事ができるようになろうと決心し、まずは、3ヵ月間の語学研修に行きました。世は、「石を投げれば日本人に当たる」時代でしたので、なるべく日本人のいなさそうなアメリカ南部を選びましたが、それでも、語学学校は、日本人だらけでした。ともかく、アメリカの大学生活を体験し、黒人差別を実感し、アムトラックでワシントンまで大陸縦断をして、学会に参加したりなど、40歳近くになったの遅ればせの留学生活を楽しみました。

その後、カナダの幼児教育の視察やイギリスでの語学研修など、ほぼ毎年、海外に出かけるようになりましたが、必ず、大学、研究者を訪ねることで、遊びに行くのではないと、自分に言い聞かせていました。

そうした中で、94年度に在在外研修が認められ、エディンバラ大学のトレヴァーセン先生のもとで過ごすことができました。彼の研究室を選択した背景は、その数年前に遡ります。当時、北大の三宅研究室を訪れていたアタッチメント研究者、グロスマンは、日本の母

子のビデオを見て、親の「からかい (teasing)」が多いと言いました。しかし、私の目は、それは、ふざけ合いにしか見えません。調べてみると、ベネディクトもまた『菊と刀』の中で親のからかいを詳細に描いていました。しかし、ポジティブなからかい研究は全く見つかりません。唯一見つかったのが、来年度の発達心理学会の招待講演者、ポーツマス大学のレディさんでした。それではと、イギリスに飛び、彼女に会ったことが、エディンバラへ行くきっかけになりました。

エディンバラでも言葉の壁は、一向に解消できませんでした。ところが、トレヴァーセン先生は、「書くものはすばらしい」と、論文の添削までしてくれました（ただし、彼の手書きを読解するのは、これまた大仕事でした）。また、私が持参した親子の手遊び場面のビデオを気に入って、ことあるごとに提示し、多くの著名な人々に私を紹介してくれました。当時、彼は、既に還暦を超えていましたが、「山を動かすのだ」と、続々と論文を書き続けている姿からは、多くを学びました。

ところで、旅にはエピソードがつきものです。ギリシャでは、ピアジェの助手で乳児模倣の発見者マラトスさんのお宅に招かれた時、迷子になり、出会った新聞配達員がバイクで連れて行ってくれましたが、「シゲルがバイクで来た」とからかわれました。インドへ行ったときには、ビザがなくて

入国できず、係官の監視のもと、石のベンチで一夜を明かし、朝になると、ネパールでビザをもらってこいと言われて、急遽、ネパールへ向かいました。やっと入国したインドでは、朝には、道端に用を足す人の行列ができ、ニューデリーの街中を野良象が歩き回っているなどの光景に驚かされました。成都の四川師範大学からは、現地まで自前で行けば、滞在費持ちで観光案内をしてくれるという条件で講義に招かれました。ベルリンのブランデンブルク門では、近藤先生（帝京大学）とばったり会いました。国内でもあり得ないような偶然があり得たのです。

ところで、レディさんの著書『驚くべき乳幼児の心の世界』を読んでいると、あれはそういうことだったのかと考えさせられる記述に出会います。これほどのチャンスを得たのに、深い議論に参加できなかった言葉の壁に無念な思いをせざるを得ません。

このように、旅は、未知との出会い、人との出会いだと言えますが、この10年は、家内を伴って出かけるようになりました。旅の思い出は誰かと共有できてこそ楽しいと思うようになったからです。旅番組を見ながら、あそこへ行った、ここでアレを食べたという思い出を楽しむようになってきました。間もなく年金生活になりますが、そうはなっても、未知との出会い、人との出会いの旅はこれから続けていこうと思います。